

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第154集

# 葉ノ木沢遺跡発掘調査報告書

国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# 葉ノ木沢遺跡発掘調査報告書

国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

## 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所にも及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されているところであります。

このような埋蔵文化財の保護と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書の葉ノ木沢遺跡は、九戸村西方にあたる折爪岳山麓の瀬月内川東岸に立地し、昭和63年・平成元年の発掘調査により、縄文時代の狩り場跡等が発見されました。南端部の段丘を中心に遺構が検出されるなど、貴重な資料を得ることができました。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました九戸村教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成2年5月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 中 村 直

## 例 言

1. 本報告書は、岩手県九戸郡九戸村大字江刺家第18地割字葉ノ木沢76ほかに所在する葉ノ木沢遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、一般国道340号の改良工事に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は、岩手県土木部と岩手県教育委員会との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号及び調査略号は、次のとおりである。

遺跡番号 I F92-2128      調査略号 HK-88・89
4. 調査面積は4,700m<sup>2</sup>である。野外調査は昭和63年10月4日から10月28日までと平成元年6月20日から7月14日まで実施した。調査資料の整理は昭和63年12月1日から12月28日までと平成元年11月1日から11月30日まで実施した。
5. 発掘調査は、昭和63年度齋藤邦雄・田鎖壽夫、平成元年度齋藤博司・齋藤實が担当し、報告書の作成は齋藤實が担当した。
6. 遺跡の基準点測量は東日本測量設計株式会社に委託した。
7. 石質鑑定は佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）に依頼した。
8. 野外調査にあたっては、九戸村教育委員会をはじめ地元の方々の御協力をいただいた。
9. 本遺跡から出土した遺物及び調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# 目 次

序  
例言

## 本 文

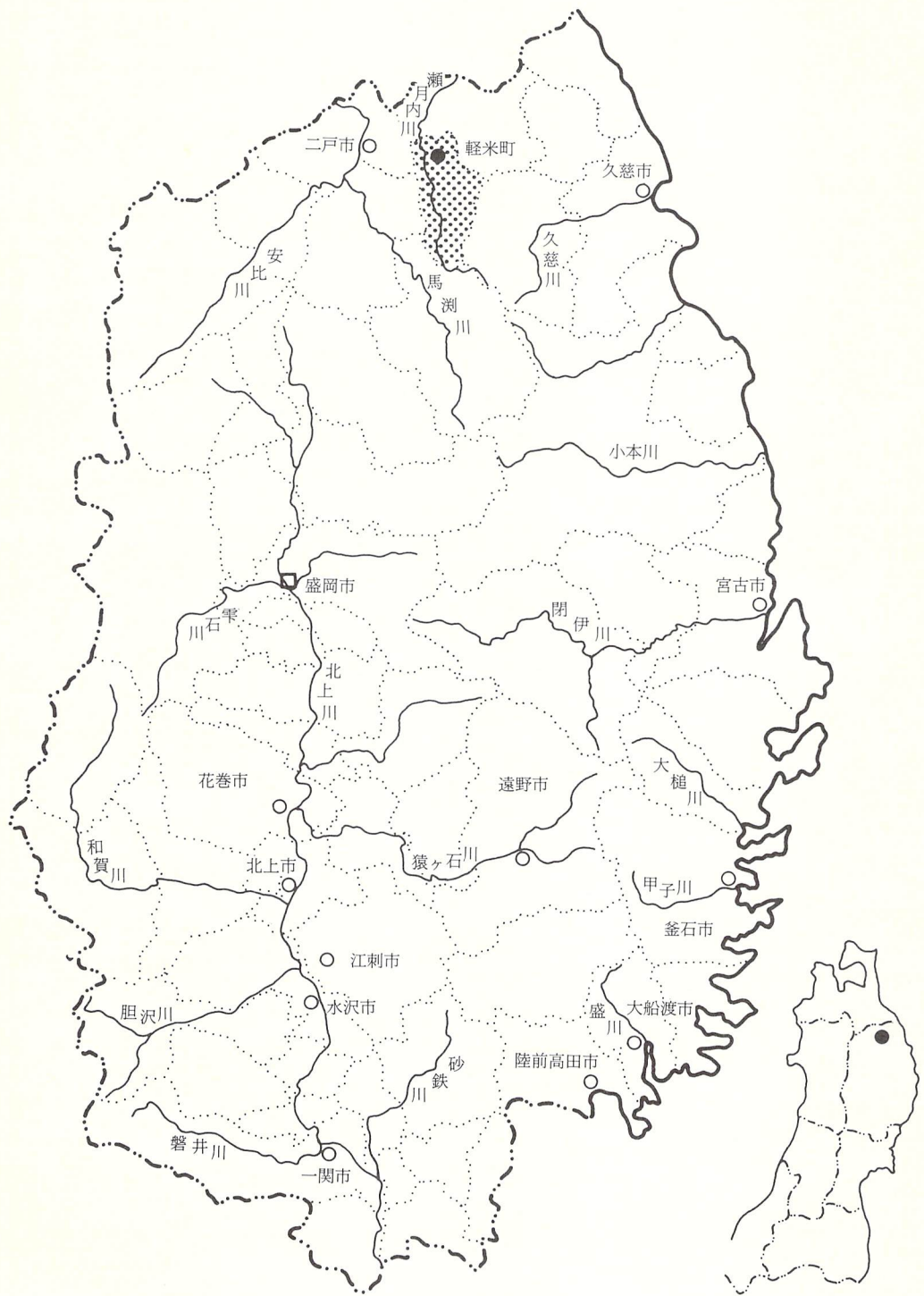
I 調査に至る経過	3
II 遺跡の立地と環境	
1. 地形と遺跡の立地	3
2. 地質	4
3. 基本層序	4
4. 周辺の遺跡	5
III 調査方法と整理方法	
1. 野外調査	9
2. 室内整理	10
IV 検出された遺構と遺物	
1. 土坑	13
2. 陥し穴状遺構	16
3. 墓壇	22
4. 遺構外出土遺物	24
V まとめ	
1. 遺構について	26
2. 遺物について	26
3. まとめ	27

## 図 版

第1図 岩手県全図にみる遺跡の位置	1	第7図 土坑(1)	15
第2図 遺跡位置図	2	第8図 土坑(2)・陥し穴状遺構(1)	17
第3図 基本層序	4	第9図 陥し穴状遺構(2)	19
第4図 遺構配置図	7	第10図 陥し穴状遺構(3)・墓壇	22
第5図 遺跡周辺の地形図	11	第11図 遺構外出土遺物(土器)	24
第6図 周辺の遺跡分布図	12	第12図 遺構外出土遺物(礫石器)	25

## 写真図版

図版1 遺跡全景	31	図版5 陥し穴状遺構(2)	35
図版2 土坑(1)	32	図版6 陥し穴状遺構(3)・墓壇	36
図版3 土坑(2)	33	図版7 遺構外出土遺物(土器・礫石器)	37
図版4 土坑(3)・陥し穴状遺構(1)	34		



第1図 岩手県全図にみる遺跡の位置



## I 調査に至る経過

一般国道340号は、陸前高田市から北上山地を縦断して八戸市に至る総延長212.97kmの主要幹線道であり、軽米町・九戸村においては基幹となる最重要路線である。九戸村管波地区においては幅員狭小、線形不良であることから、同村大字江刺家第15地割字道地87から同第17地割字丸木橋54-11までの延長1.12km、幅員11mの改良工事が昭和62年に着手され、平成3年に完成の予定である。

これにかわる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、岩手県土木部と岩手県教育委員会との間で協議がなされ、改良工事に関連する遺跡の分布調査は昭和60年12月3日付け「二土第1334号」による依頼を受けて県教育委員会文化課が昭和60年12月23・24日に実施した。これをもとにさらに協議を重ね、同61年11月7・8日に現地確認を行い、管波I遺跡、葉ノ木沢遺跡、丸木橋遺跡の3遺跡について事前の発掘調査を実施することとした。

これにより葉ノ木沢遺跡については、昭和62年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査事業に組み入れられ、昭和63年9月26日付け委託契約により調査に着手することとなった。また、買収未了の2,300㎡については継続調査することとし、平成元年6月1日付け委託契約により調査を実施したものである。

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地形と遺跡の立地（第1・2・5図）

葉ノ木沢遺跡は岩手県九戸村江刺家に所在し、八戸自動車道九戸インターチェンジの北約3km、国道340号の東側に位置している。

本村は岩手県の北部北上山地の北端に位置している。本村を含む周辺地域は、北上山地の比較的高い山地が南北に連なり、起伏に富んだ複雑な地形を呈し、標高300m前後の丘陵地が各地に見られる。地形は、北流する瀬月内川を境として西側と東側では様相を異にしている。西側は折爪岳（852.2m）、小倉岳（652.3m）、傾城峠（735.9m）などの急傾斜をなす山脚部がほぼ南北に直線状に延びており、これらの東斜面を大小の沢や谷が開析し、瀬月内川に合流している。東側は北上山地の古い隆起準平原を起源とする起伏量の小さな山地が広がっている。しかし、荒谷地区から江刺家地区にかけての地域には標高300～345mの丘陵地が比較的広範囲にみられ、比較的大きな起伏を示している。

葉ノ木沢遺跡の所在する地域は、北流する瀬月内川によって形成された標高230～240mの洪積世低位段丘上にあり、遺跡を含む周辺の現況は、畑地及び果樹園となっている。なお、瀬月内川を挟んだ西岸の低位段丘上には管波I遺跡が位置している。



## 2 地 質

遺跡付近の地層は、扇状地堆積物と十和田火山起源の火山砕屑物によって構成されている。扇状地の基盤は砂岩と粘板岩が主体をなしており、この上位に礫混じり砂質土・礫混じり粘性土・有機質土・軽石質火山灰が互層をなして扇状地堆積物を構成している。これらの堆積物に含まれる礫は、ほとんどがチャート・粘板岩質チャート・粘板岩・石灰岩の亜角礫である。

## 3 基本層序 (第3図)

調査区域内では、基本的には第4図に示すような層序が観察されるが、部分的には攪乱や土砂の移動により層序の乱れる所がある。本遺跡の基本層序は以下のように大別される。

第I層 黒褐色土 (10Y R 2 / 3) シルト質土耕作土である。層厚は10~20cmである。

第II層 黒褐色土 (10Y R 3 / 2) シルト質土 黒色土を主体に若干の粒径の小さい南部浮石を含む。調査区の中央から南側平坦部及び最南端斜面まで広く分布し、耕作土の下部を構成する。層厚は20cmである。

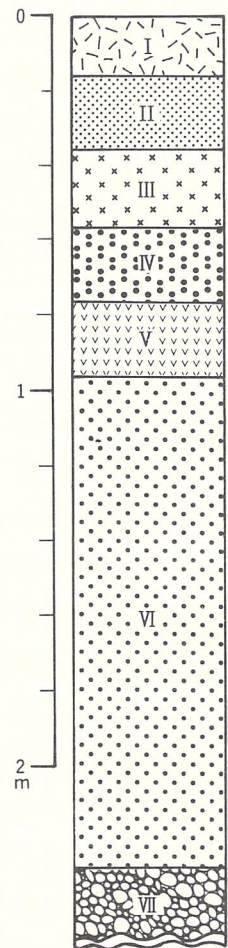
第III層 暗褐色土 (10Y R 3 / 4) 南部浮石の人為層である。遺跡中央部から南側平坦部及び最南端の斜面に認められる。かつて水田として使用された区域に分布し、水田の保水のために盛土されたものである。層厚は10~40cmである。

第IV層 褐色土 (10Y R 4 / 4) 砂質土 中振浮石相当層 下位は黒色土の混じりが多くなる。調査区の中央部及び南端部に認められ、北端では流失している。最南端の平坦部では下位から遺物が出土している。層厚は10~40cmである。

第V層 明黄褐色土 (10Y R 6 / 8) 南部浮石 若干の黒色土、黄褐色浮石細粒をブロック状に含んでいる。かつて水田となっていたH・I 14~H・I 15、G・H21~F・G 30地点では、水田化の際に完全に除去されている。層厚は10~40cmである。

第VI層 黄褐色土 (10Y R 5 / 6) 八戸火山灰 粘土質土で礫層を覆っている。瀬月内川に面した最南端の平坦面では、下位の部分に砂層と互層をなしている部分もある。層厚は確認部分では130cm以上である。

第VII層 段丘礫層



第3図 基本土層

#### 4 周辺の遺跡（第6図）

九戸村で現在までに、分布調査などにより遺跡の存在が確認されているのは50数カ所に及んでいる。

遺跡の分布状況を概観すると、その多くは瀬月内川沿いに存在し、そのうち9割以上の遺跡が瀬月内川左岸の折爪岳山脚部の緩斜面上に立地している。これらのほとんどは緩やかな丘陵地が発達している江刺家・伊保内・山根地区に集中する傾向がみられる。

標高250～280mの低位段丘相当の台地上には縄文時代早期～中期・奈良時代・平安時代・中世の遺跡が、標高280～350mの中位丘陵地状地形面上には縄文時代後期・晩期の遺跡が多く立地する傾向にあることが指摘されており、さらに遺跡の立地傾向が湧水の分布と強く結びついていることが明らかにされている。

発掘調査により報告された遺跡には、田代遺跡（草間俊一・昭和30年）・妻の神遺跡（草間俊一・昭和35年）、山根遺跡（草間俊一・昭和47年）がある。昭和55年以降の八戸自動車道建設に伴って発掘調査された遺跡には、田代遺跡、道地Ⅱ・Ⅲ遺跡、嶽Ⅰ・Ⅱ遺跡、江刺家・江刺家Ⅳ・Ⅴ遺跡、滝谷Ⅲ遺跡がある。また、畑地帯総合土地改良事業に伴って発掘調査された遺跡には、川向Ⅲ遺跡、伊保内Ⅰa・Ⅰb遺跡がある。昭和63年・平成元年には国道340号改良工事に伴い、管波Ⅰ遺跡・葉ノ木沢遺跡が発掘調査された。九戸村に所在する遺跡は、上記のような開発事業に伴って知られたものが多く、地域も江刺家地区・伊保内地区に片寄っている。

調査された遺跡の内容を通観すると、縄文時代早期では竪穴住居跡などの遺構の検出例はないが、貝殻沈線文系の土器が数遺跡から発見されている。縄文時代前期では、田代遺跡から円筒下層d式期に相当する竪穴住居跡が1棟検出されているのみで、他の遺跡からは前期後半を中心とする遺物が発見されている。縄文時代中期になると、前期に比較して遺構の検出例が急激に増加する傾向を見せ、7遺跡から40数棟の竪穴住居跡が検出されている。特に、田代遺跡では縄文時代中期における大木式土器文化圏と円筒式土器文化圏の接触・交替を示す好資料が発見されている。縄文時代後期では、滝谷Ⅲ遺跡からは、後期前葉の竪穴住居跡11棟が検出されている。縄文時代晩期では、前時期と比較して遺跡数・遺構数とも大きな変化はない。道地Ⅲ遺跡では晩期前半期に属する竪穴住居跡が検出されている。

弥生時代に入ると、縄文時代に比べて遺跡は激減する。僅かに嶽Ⅱ遺跡で磨消文・平行沈線文・鋸歯状沈線文の施文された土器が発見されているのみである。

土師器が発見される遺跡は数多く知られているが、調査によって奈良時代のものであると確認されている遺構は、田代遺跡から検出されている竪穴住居跡1棟のみである。栗圀式～国分寺下層式の時期が想定されており、ほぼ8世紀頃の竪穴住居跡と思われる。平安時代になると、奈良時代に比較して急激に増加の兆しを見せる。特に、江刺家遺跡からは33棟の竪穴住居跡が

検出され、大規模な集落跡であったことが明らかにされている。

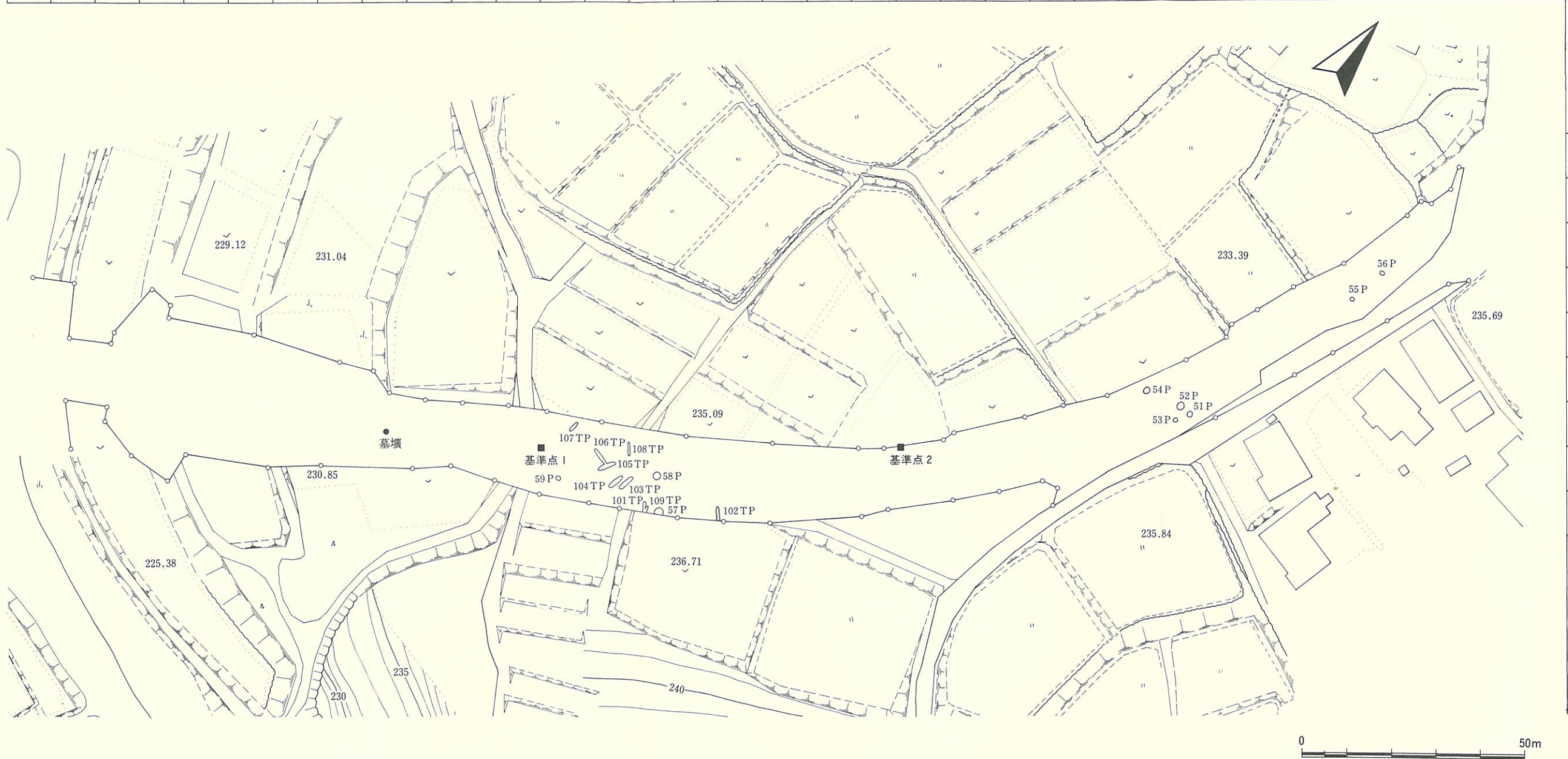
中世に入ると、現在までのところ17カ所の城館跡が確認されている。開田等により消滅した遺跡もあるが、堀跡・土塁跡などが確認されている。このなかで伊保内 I b 遺跡の調査では伊保内館跡に伴う堀跡の一部が検出されている。

以上、九戸村の遺跡について概観してきたが、時代・遺跡毎にその内容に疎密はあるものの縄文時代早期から人間の営みの痕跡をたどることができる。しかし、これら資料は開墾に伴って発掘調査された遺跡からの発見であり、おのずから限定された資料である。今後、山間部の分布調査により遺跡の数もさらに増加するものと思われる。

#### 引用・参考文献

- 石野公一（1972）：『北上山系開発地域土地分類基本調査（一戸）』岩手県  
岩手教育委員会（1986）：『岩手県中世城館跡分布調査報告書』  
種市 進（1982）：「折爪岳東麓の遺跡と湧水」『紀要II』（助岩手県埋蔵文化財センター  
助岩手県埋蔵文化財センター（1983）：『道地II・III遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第64集  
助岩手県埋蔵文化財センター（1984）：『嶽II遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第78集  
助岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1989）：『管波 I 遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第139集

33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---



A
B
C
D
E
F
G
H
I

第4図 遺構配置図

### III 調査方法と整理方法

#### 1 野外調査

##### (1) 調査区の設定 (第4図)

調査区は東西10~20m、南北約300mで緩やかな曲線を描き南北に細長く延びているため、基準線となる中心線は可能な限り調査区内に含まれるように任意の2点を設定し、それぞれ基準点とした。

基準点1・2の平面直角座標第X系による成果値、及び杭高は、以下のとおりである。

基準点1    X = 29,984.420m    Y = 49,229.335m    H = 240.769m

基準点2    X = 30,049.635m    Y = 49,275.532m    H = 238.549m

グリットの設定にあたっては、基準点1と基準点2を結ぶ直線とこれに直交する直線をそれぞれ10m毎に区画した。グリットは北から南へA~I、東から西へ01~33を与え、A02区・D30区などのように呼称した。

##### (2) 粗掘り・遺構検出

調査開始当初、瀬月内川の東岸沿いに1×10mのトレンチを設定し、表土を10~20cm除去したが礫層に達し、遺構は確認されなかった。調査区最南端の平坦面には3×20mのトレンチ4本を設定したが、西側部分は開田の際に削平をうけ、東側の斜面に盛土をしたことが判明した。また、調査区南端部の緩斜面上の東南部に1×10mのトレンチを設定した結果、耕作のための盛土であることが判明した。表土は開田の際の盛土が厚く、遺物が極めて少ないことから、重機による表土除去を行うこととした。その後、人力によって掘り下げ遺構検出を行った。

##### (3) 遺構の命名

検出された遺構の大部分は削平をうけており、遺構の検出面が本来の構築面を示すものではないが、遺構名は検出順に連番を付して下記のように命名した。

住居跡 1~      土坑 51~      陥し穴状遺構 101~

##### (4) 精査と実測

土坑、陥し穴状遺構は2分法で精査を行った。遺構の実測図作成にあたっては、グリット軸に合わせて1mメッシュを基本とする簡易遣り方を設定し、20分の1の縮尺を用いて行った。基本層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

##### (5) 写真撮影

野外調査における写真撮影は、35mm判2台(モノクロ、カラー・リバーサル)と6×7cm判モノクロ1台を使用した。

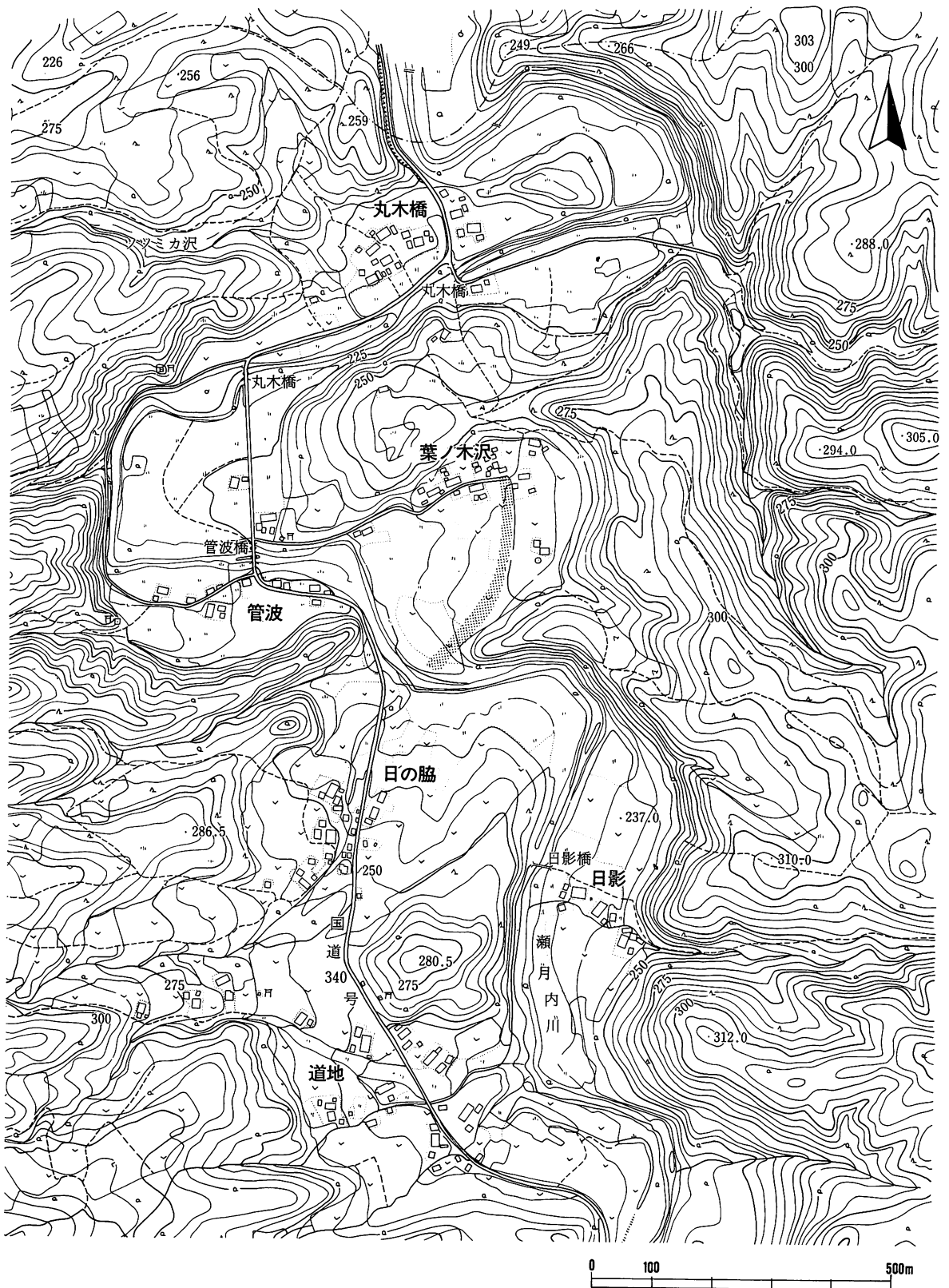
## 2 室内整理

### (1) 遺物整理

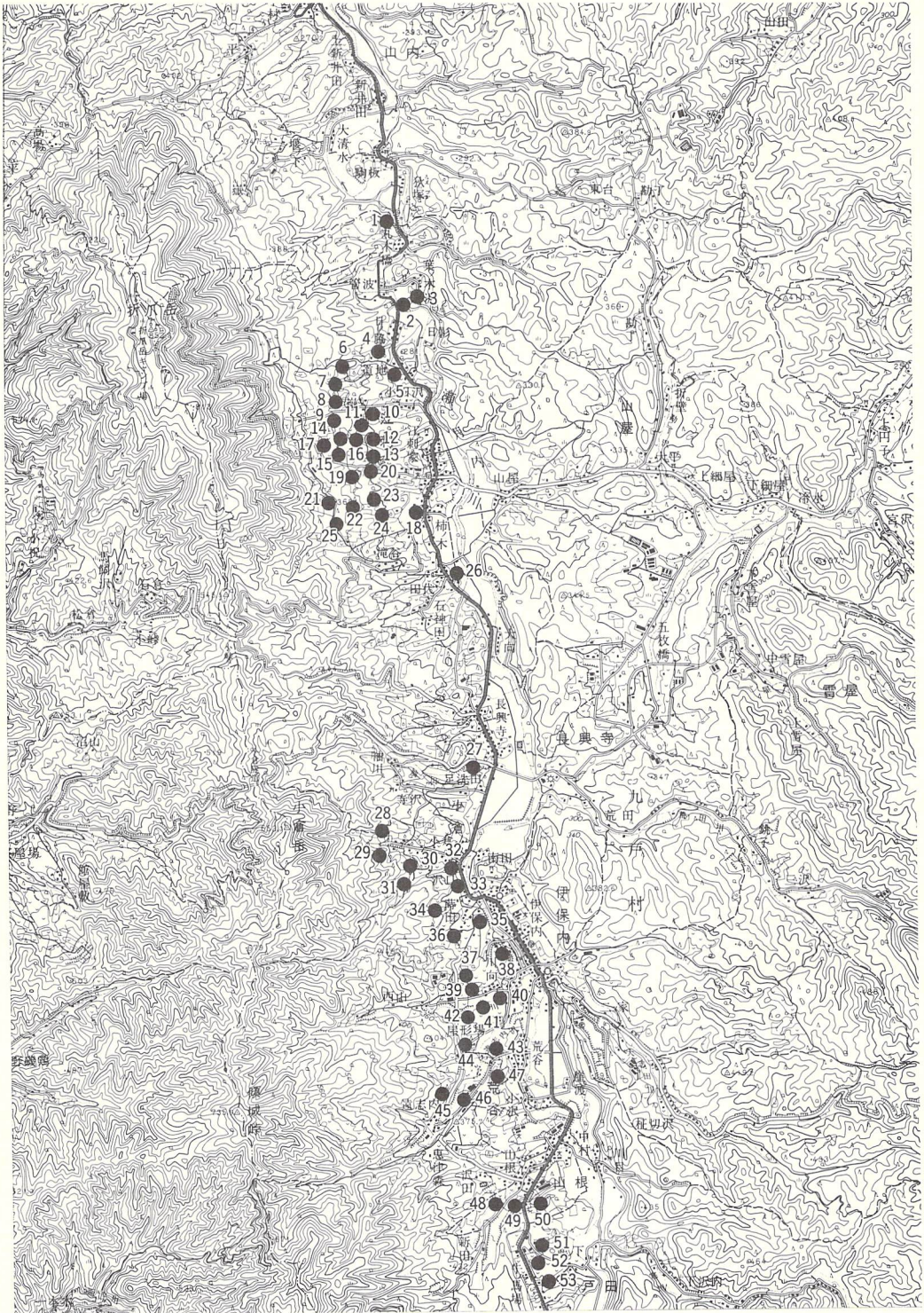
遺物の処理は、水洗とラベルの記入を行い、種類別に仕分け・接合復元・実測・トレース・拓本・写真撮影の順に作業を実施した。

### (2) 図版

報告書に掲載した遺構実測図の縮尺は、土坑は40分の1、陥し穴状遺構は60分の1の縮尺とし、方位は磁北を示した。遺物実測図の縮尺は、土器拓影は2分の1、石器は3分の1である。遺物に付した番号は、土器・石器は各種別に連番とし、写真図版と同一にした。



第5図 遺跡周辺の地形図



第6図 周辺の遺跡分布図



周辺の遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	時代	備考
1	丸木橋	大字江刺家第17地割字丸木橋	縄文(晩)	
2	管波 I	〃 第16地割字管波	縄文(早・前・後)	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第139集
3	葉ノ木沢	〃 第18地割字葉ノ木沢	縄文(早・後)、奈良・平安(土師)	昭和63年・平成元年調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第154集
4	管波 II	〃 第16地割字管波	縄文(晩)・平安(土師)	
5	道地	〃 第14地割字道地		
6	道地 II	〃 〃 字築場	縄文(後・晩)	岩手県埋文センター文化財調査報告書第64集
7	道地 III	〃 〃	縄文(前・中・後・晩)	〃
8	獄 I	〃 第14地割字築場	縄文(前・後・晩)	岩手県埋文センター文化財調査報告書第50集
9	獄 II	〃 第13地割	縄文(早～晩)・平安	岩手県埋文センター文化財調査報告書第78集
10	獄 III	〃 第12地割	縄文(晩)	
11	獄 IV	〃 第13地割	縄文(晩)	
12	獄 V	〃 第12地割	縄文(後・晩)	
13	江刺家 I	〃 第12地割	縄文(晩)	
14	江刺家 II	〃 第13地割	縄文(後・晩)	
15	江刺家 III	〃 〃	縄文(中・後・晩)	
16	江刺家 IV	〃 第13地割字鍋倉	縄文(前・中・後・晩)	岩手県埋文センター文化財調査報告書第59集
17	江刺家 V	〃 〃	縄文(中・後)	〃
18	江刺家	〃 〃	縄文(早・中・後)・平安	岩手県埋文センター文化財調査報告書第70集
19	若宮 I	〃 第8地割	縄文(晩)	
20	若宮 II	〃 〃	縄文(晩)	
21	滝谷 I	〃 〃	縄文(晩)	
22	滝谷 II	〃 〃	縄文(晩)	
23	滝谷 III	大字江刺家字間木内	縄文(前・中・後・晩)・平安	岩手県埋文センター文化財調査報告書第49集
24	滝谷 IV	〃 〃	縄文(晩)・平安(土師)	
25	滝谷 V	〃 〃	縄文(中・後・晩)・平安(土師)	
26	田代	〃 第2地割字田代	縄文(早・前・中)・奈良	日本考古学年報No13 岩手県埋文センター文化財調査報告書第41集
27	長興寺	大字長興寺第3地割	縄文(中)	
28	小倉 I	大字小倉	縄文(中・後)	
29	小倉 II	〃 〃	縄文(中)・奈良・平安(土師)	
30	小倉 III	大字伊保内	奈良・平安(土師)	
31	小倉 IV	〃 〃	縄文(中)	
32	南田 I	〃 〃	縄文(晩)	
33	南田 II	〃 〃	縄文(中・後・晩)	
34	蒔田 I	〃 〃	縄文(晩)	
35	蒔田 II	〃 〃	縄文(中)	
36	蒔田 III	〃 〃	奈良・平安(土師)	
37	伊保内 I a	〃 〃	縄文(早・後・晩)	岩手県埋文センター文化財調査報告書第53集
38	伊保内 I b	〃 〃	中世	〃
39	川向 I	〃 〃	縄文(中)・奈良・平安(土師)	
40	川向 II	〃 〃	縄文(中)・奈良・平安(土師)	
41	川向 III	〃 〃	縄文(中・晩)・平安	岩手県埋文センター文化財調査報告書第26集
42	川向 IV	〃 〃	奈良・平安(土師)	
43	尾形場 I	〃 〃	縄文(中?)・奈良・平安(土師)	
44	尾形場 II	〃 〃	縄文(中?)・奈良・平安(土師)	
45	遠志内 I	大字荒屋	縄文(後)	
46	遠志内 II	〃 〃	縄文(中?)	
47	遠志内 III	〃 〃	縄文(中)	
48	山根 I	大字山根	縄文(晩)	
49	山根 II	〃 〃		
50	山根 III	〃 〃	縄文(晩)	
51	牛の馬場 I	大字戸田	縄文(中)	
52	牛の馬場 II	〃 〃	奈良・平安(土師)	
53	牛の馬場 III	〃 〃	縄文(後)・奈良・平安(土師)	

## IV 検出された遺構と出土遺物

本遺跡から検出された遺構は、縄文時代の土坑 9 基、陥し穴状遺構 9 基、中世以降の墓壇 1 基である。遺物は、縄文時代の土器、石器、中世の古銭などである。

### 1 土坑

#### 第51号土坑（第7図 写真図版2）

調査区北端のG07グリットに位置する。検出面はV層上面である。平面形は不整の楕円形、断面形は箱形を呈する。規模は開口部径130×114cm、底部径100×80cm、深さ28cmを測る。埋土中に南部浮石が多量に入り込んでおり、自然堆積の層相を示している。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。

#### 第52号土坑（第7図 写真図版2）

調査区北端のG07グリットに位置する。検出面はV層上面である。平面形は円形、断面形はU字形を呈する。規模は開口部径143×140cm、底部径97×96cm、深さ78cmを測る。埋土は自然堆積の様相を示し、壁の崩壊土と考えられる南部浮石の再堆積層が壁際にみられる。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。

#### 第53号土坑（第7図 写真図版2）

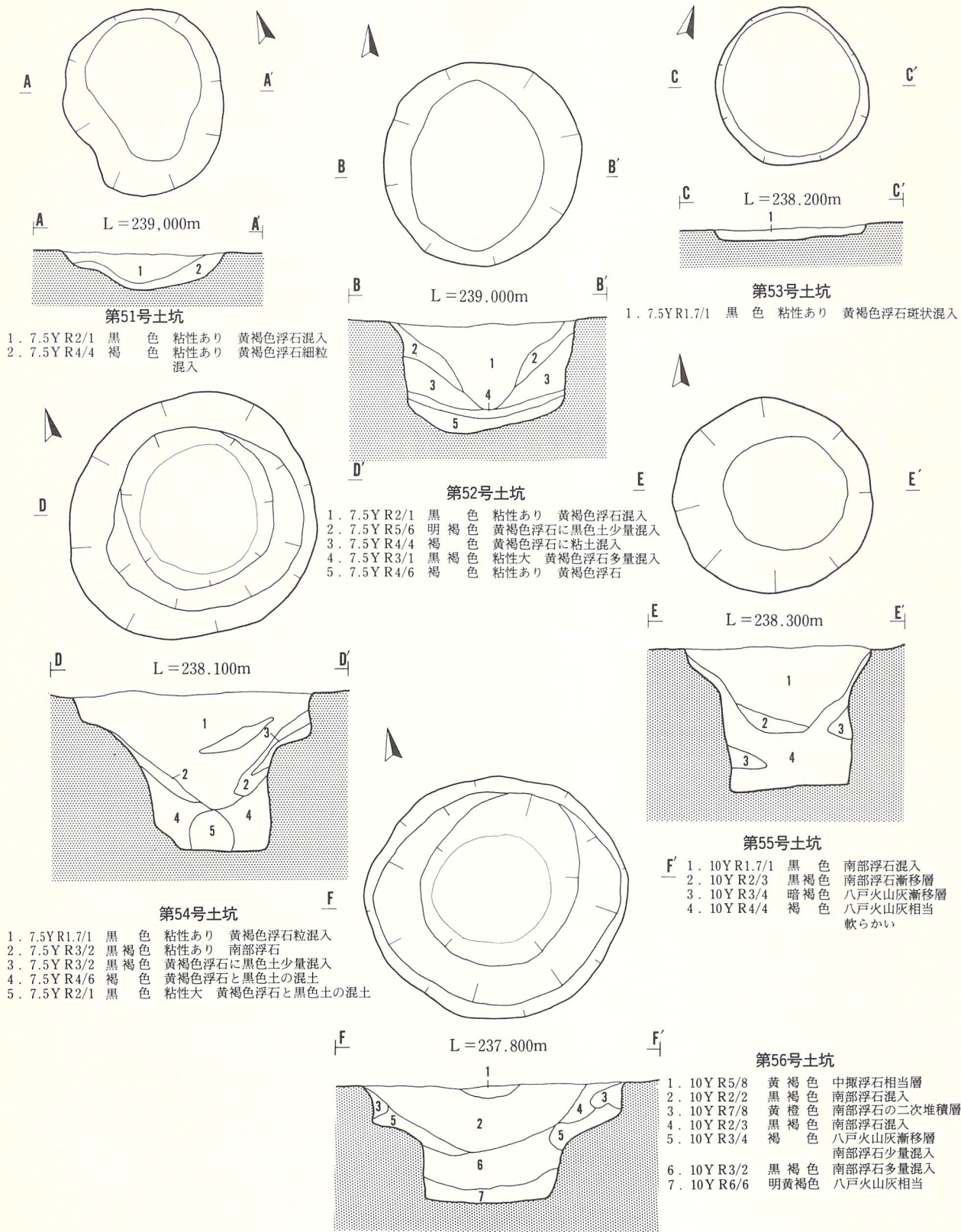
調査区北端のG07グリットに位置する。検出面はV層上面である。平面形は円形、断面形は箱形を呈し、壁はほぼ垂直に立上り、底面は比較的平坦である。規模は開口部径110×104cm、底部径102×92cm、深さ9cmを測る。埋土は黒色土を主体に少量の南部浮石が混入している。周囲は開田のためかなり削平をうけており、本来はもっと深い土坑であったと思われる。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。

#### 第54号土坑（第7図 写真図版2）

調査区北端のF08グリットに位置する。検出面はV層上面である。平面形は円形、断面形はすり鉢形を呈している。規模は開口部径181×172cm、底部径89×87cm、深さ、112cmを測る。埋土下部は黒色土と南部浮石が互層をなしており、長期間にわたる自然堆積と思われる。全体に南部浮石の堆積が見られる。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。



第7図 土坑(1)

#### 第55号土坑（第7図 写真図版3）

調査区北端のD03グリットに位置する。検出面はV層上面である。平面形は円形、断面形はU字形を呈している。規模は開口部径139×137cm、底部径82×82cm、深さ101cmを測る。埋土は下部にしまりのない八戸火山灰が、上部には黒色土が堆積しており、自然堆積の様相を示している。

遺構内から遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。

#### 第56号土坑（第7図 写真図版3）

調査区北端側のD03グリットに位置する。検出面はV層上面である。平面形は円形、断面形は筒形を呈し、底面は比較的平坦である。規模は開口部径173×173cm、底部径81×77cm、深さ21cmを測る。埋土は、自然堆積の様相を示している。

遺物は出土しておらず、所属時期については不明である。しかし、埋土最上部に中礫浮石が堆積しており、遺構の下限は縄文時代前期以前と推定される。

#### 第57号土坑（第8図 写真図版3）

調査区南側緩斜面のI19グリットに位置する。検出面はV層上面である。平面形は不整楕円形、断面形はすり鉢形を呈している。規模は開口部径232×163cm、底部径36×75cm、深さ110cmを測るが、遺構の一部は調査区の南側に延びており、全体の規模は不明である。埋土は自然堆積の様相を示している。埋土最上部に中礫浮石が堆積し、全体に黒色土と南部浮石が互層をなしている。

遺物は出土しておらず、所属時期については不明である。しかし、埋土最上部に中礫浮石が堆積しており、遺構の下限は縄文時代前期以前と推定される。

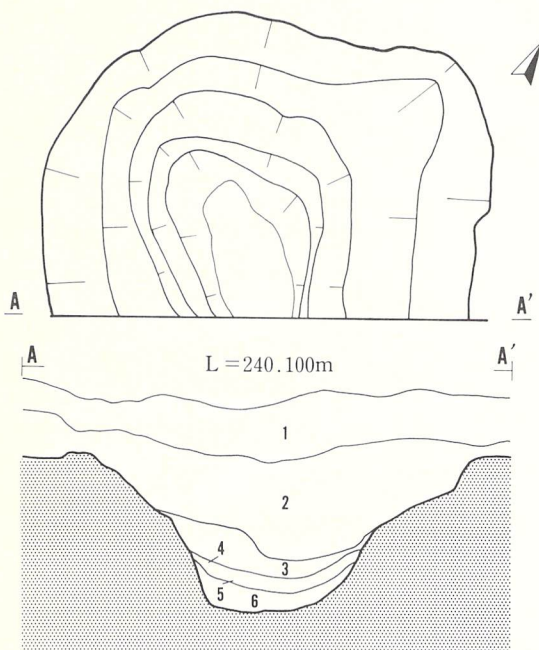
#### 第58号土坑（第8図 写真図版3）

調査区南側緩斜面のH19グリットに位置する。検出面はV層上面である。平面形は円形、断面形はU字形を呈している。規模は開口部径185×178cm、底部径48×62cm、深さ123cmを測る。埋土は上部に黒色土が、下部に八戸火山灰が堆積し、自然堆積の様相を示している。全体に黒色土と南部浮石が多量に混入し、互層をなしている。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。

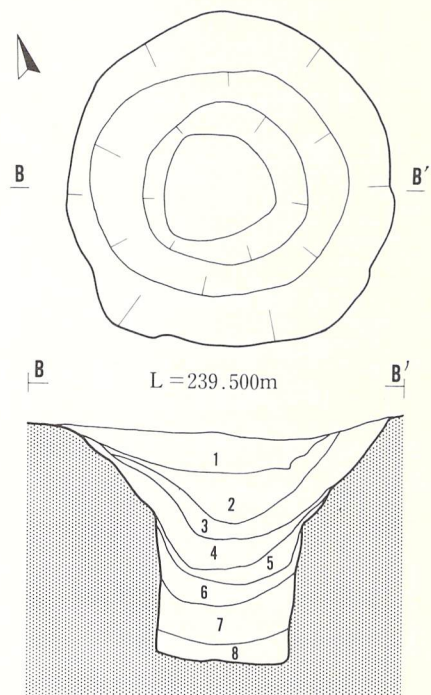
#### 第59号土坑（第8図 写真図版4）

調査区南側緩斜面のH21グリットに位置する。検出面はV層上面である。平面形は不整の楕



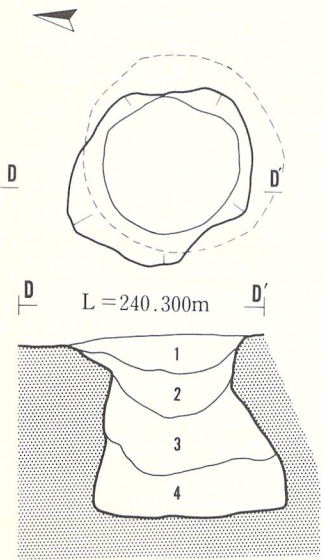
第57号土坑

- 1. 10Y R5/8 黒褐色 中礫浮石相当層
- 2. 7.5Y R2/1 黒色 黄褐色浮石に黒色土混入
- 3. 10Y R5/6 黄褐色 南部浮石の二次堆積層
- 4. 7.5Y R2/2 黒褐色 黄褐色浮石に黒色土混入
- 5. 10Y R4/6 褐色 八戸火山灰相当



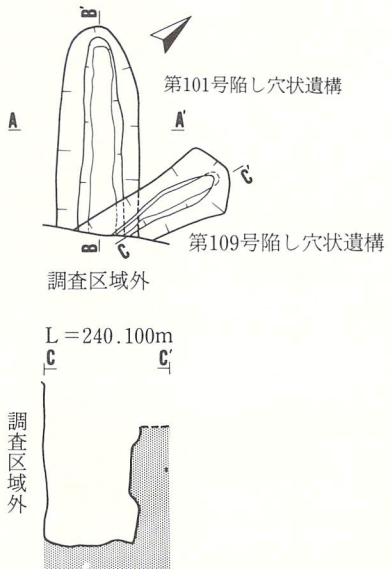
第58号土坑

- 1. 7.5Y R2/1 黒色 黄褐色浮石と砂質土少量混入
- 2. 7.5Y R2/3 黒褐色 黄褐色浮石細粒混入
- 3. 7.5Y R3/3 暗褐色 黄褐色浮石の二次堆積層
- 4. 7.5Y R2/1 黒色 黄褐色浮石と砂質土混入
- 5. 10Y R2/3 黒褐色 黄褐色浮石混入
- 6. 10Y R3/4 暗褐色 粘性あり 八戸火山灰漸移層
- 7. 10Y R2/2 黒褐色 砂質土に黄褐色浮石多量混入
- 8. 10Y R6/8 黄褐色 八戸火山灰相当 軟らかい



第59号土坑

- 1. 7.5Y R2/3 暗褐色 中礫浮石相当層
- 2. 7.5Y R2/2 黒褐色 黒色土に砂質土混入
- 3. 7.5Y R3/3 暗褐色 砂質土と黄褐色浮石少量混入
- 4. 7.5Y R3/2 黒褐色 粘性あり 砂質土混入



第101号陥し穴状遺構

- 1. 7.5Y R2/1 黒色
- 2. 7.5Y R2/2 黒褐色
- 3. 10Y R2/3 黒褐色 黄褐色浮石と黒色土混入
- 4. 10Y R5/6 黄褐色 南部浮石
- 5. 10Y R5/8 黄褐色 粘性あり 八戸火山灰相当

第8図 土坑(2) 陥し穴状遺構(1)

円形、断面形はフラスコ形を呈している。底面は比較的平坦である。規模は開口部径107×86cm、底部径114×108cm、深さ97cmを測る。埋土は、自然堆積の様相を示している。

遺物は出土しておらず、所属時期については不明である。しかし、埋土中に中礫浮石が堆積しており、遺構の下限は縄文時代前期以前と推定される。

## 2 陥し穴状遺構

### 第101号陥し穴状遺構（第8図 写真図版4）

調査区南側緩斜面のI 19グリットに位置する。検出面はIV層下面である。平面形は開口部、底部ともに溝状、断面形はY字状を呈する。南東側の一部は調査区外に延びており、全体の規模は不明であるが、開口部の規模は107×86cm、底部114×108cm、深さ97cmを測る。長軸の方向は北西—南東を示している。側壁は底面から外傾して立ち上がり、底面は緩やかに凹んでいる。埋土は開口部付近で黒褐色土が主体であるが、その堆積状況が不自然であるため、開口部の堆積状況の把握が困難であった。これは第109号陥し穴状遺構が構築される際に、攪乱をうけたものと思われる。第109号陥し穴状遺構と重複関係にあり、本遺構が古い。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。

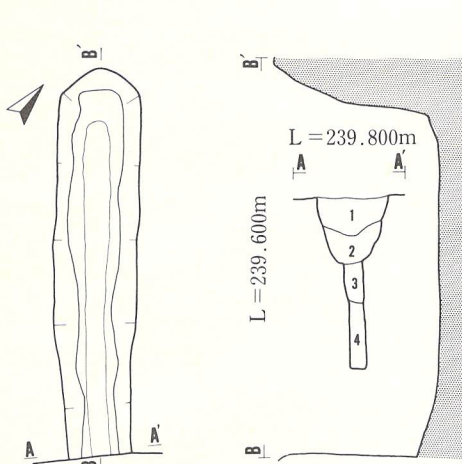
### 第109号陥し穴状遺構（第8図 写真図版4）

調査区南側緩斜面のI 19グリットに位置する。検出面はIV層下面である。平面形は開口部、底部ともに溝状、断面形はY字状を呈する。南東側の一部は調査区外に延びており、全体の規模は不明であるが、開口部の規模は101×55cm、底部97×13cm、深さ133cmを測る。底面は緩やかに凹み、長軸方向の北西部分を抉り込んでいる。側壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近では東側は丸みをおびながら大きく外反し、西側は外傾し大きく外反している。長軸の方向は北東—南西を示している。埋土は黒褐色土が主体であり、壁の崩壊土と思われる南部浮石が混入している。第101号陥し穴状遺構と重複関係にあり、本遺構が新しい。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。

### 第102号陥し穴状遺構（第9図 写真図版4）

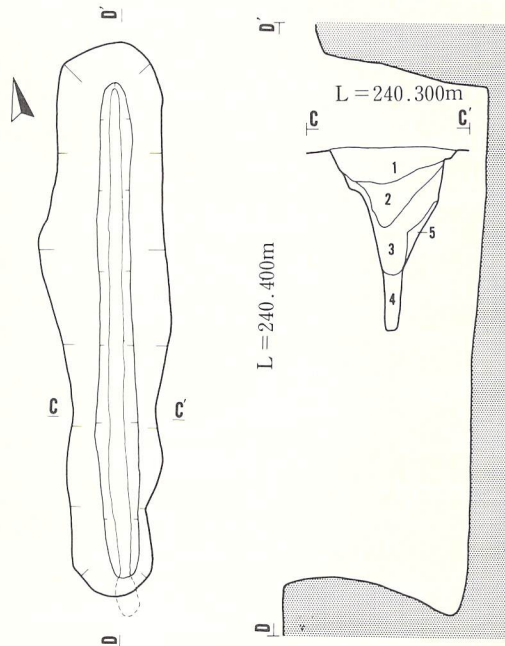
調査区南側緩斜面のI 17グリットに位置する。検出面はIV層下面である。平面形は開口部、底部ともに溝状、断面形はY字状を呈する。南東側の一部は調査区外に延びており、全体の規模は不明であるが、規模は開口部で311×68cm、底部で168×21cm、深さ139cmを測る。長軸の方向は北西—南東を示している。底面は緩やかに凹み、側壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっており、開口部付近で丸みをもちながら大きく外反している。埋土は、黒褐色土を主体に壁の崩



第102号陥し穴状遺構

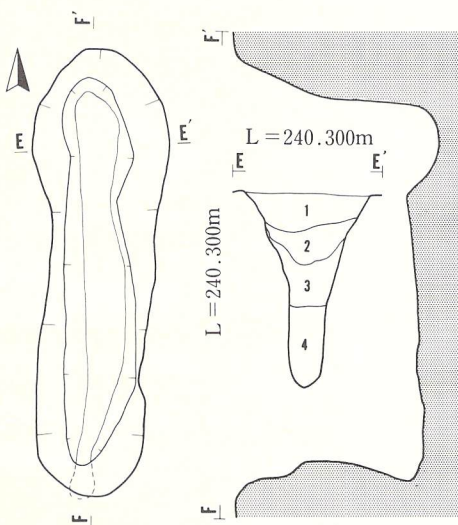
- |              |     |             |
|--------------|-----|-------------|
| 1. 7.5Y R2/1 | 黒色  | 砂質土少量混入     |
| 2. 7.5Y R2/3 | 黒褐色 | 黄褐色浮石細粒少量混入 |
| 3. 10Y R2/3  | 黒褐色 | 南部浮石に黒色土混入  |
| 4. 10Y R4/6  | 褐色  | 南部浮石と黒色土混入  |

調査区域外



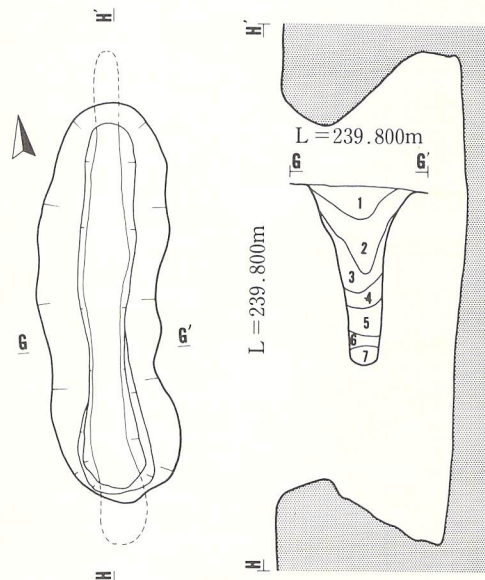
第103号陥し穴状遺構

- |              |     |              |
|--------------|-----|--------------|
| 1. 7.5Y R3/3 | 暗褐色 |              |
| 2. 7.5Y R2/1 | 黒色  | 南部浮石混入       |
| 3. 7.5Y R2/2 | 黒褐色 | 南部浮石多量混入     |
| 4. 10Y R3/3  | 暗褐色 | 南部浮石と砂質土混入   |
| 5. 10Y R5/6  | 黄褐色 | 粘性あり 八戸火山灰相当 |



第104号陥し穴状遺構

- |              |     |              |
|--------------|-----|--------------|
| 1. 7.5Y R2/2 | 黒褐色 |              |
| 2. 7.5Y R2/1 | 黒色  | 南部浮石と砂質土少量混入 |
| 3. 10Y R2/3  | 暗褐色 | 南部浮石に黒色土混入   |
| 4. 10Y R4/4  | 褐色  | 南部浮石と黒色土混入   |



第107号陥し穴状遺構

- |              |      |             |
|--------------|------|-------------|
| 1. 7.5Y R2/2 | 黒褐色  | 黄褐色浮石細粒少量混入 |
| 2. 7.5Y R2/1 | 黒色   | 黄褐色浮石混入     |
| 3. 10Y R2/3  | 黒褐色  | 黄褐色浮石と砂質土混入 |
| 4. 7.5Y R2/3 | 極暗褐色 | 黄褐色浮石と褐色土混入 |
| 5. 10Y R4/6  | 褐色   | 南部浮石        |
| 6. 7.5Y R3/4 | 暗褐色  | 南部浮石と砂質土混入  |
| 7. 10Y R5/6  | 黄褐色  | 南部浮石と砂質土混入  |

第9図 陥し穴状遺構(2)

壊土と思われる南部浮石が混入している。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。

#### 第103号陥し穴状遺構（第9図 写真図版5）

調査区南側緩斜面のH19グリットに位置し、西側70cmには同一方向の第104号陥し穴遺構が平行して隣接する。検出面はIV層下面である。平面形は開口部・底部ともに溝状、断面形はU字状を呈する。規模は開口部で426×101cm、底部で423×16cm、深さ138cmを測る。長軸の方向は北一南を示している。底面は緩やかに凹み、長軸方向の南側は抉り込んでいる。側壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっており、開口部付近で丸みをもちながら大きく外反している。埋土は、黒褐色土を主体に壁の崩壊土と思われる南部浮石が混入している。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。

#### 第104号陥し穴状遺構（第9図 写真図版5）

調査区南側緩斜面のH20グリットに位置する。検出面はIV層下面である。平面形は開口部・底部ともに溝状、断面形はU字状を呈する。規模は開口部で358×111cm、底部で326×34cm、深さ168cmを測る。長軸の方向は北一南を示している。底面は緩やかに凹んでいる。側壁は、底面から外傾して立ち上がり、開口部付近では丸みをもちながら緩やかに外反している。埋土は黒褐色土が主体であり、壁の崩壊土と思われる南部浮石が混入している。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。

#### 第107号陥し穴状遺構（第9図 写真図版6）

調査区南側緩斜面のG21グリットに位置する。検出面はV層上面である。平面形は開口部・底部ともに溝状、断面形はU字状を呈する。規模は開口部で323×98cm、底部で392×37cm、深さ149cmを測る。長軸の方向は北一南を示している。底面は緩やかに凹んでいる。長軸方向の底部は大きく抉り込んでいる。側壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近では東側は大きく外反し、西側は丸みをもちながら緩やかに外反して立ち上がる。埋土は開口部では黒褐色土が、底面上位壁面から底面にかけて褐色土が主体であるが、壁の崩壊土と思われる南部浮石が混入し、互層をなして堆積している。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。



#### 第105号陥し穴状遺構（第10図 写真図版5）

調査区南側緩斜面のH20グリットに位置する。検出面はIV層下面である。平面形は開口部・底部ともに溝状、断面形はY字状を呈する。規模は開口部で438×108cm、底部で389×23cm、深さ148cmを測る。長軸の方向は北東―南西を示している。底面は緩やかに凹み、側壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で丸みをもちながら緩やかに外反する。埋土は黒褐色土が主体であり、壁の崩壊土と思われる南部浮石が混入している。本遺構は第106号陥し穴状遺構と西側中央部分で直交しており、第106号陥し穴状遺構の南東の先端部を切って構築されている。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。

#### 第106号陥し穴状遺構（第10図 写真図版5）

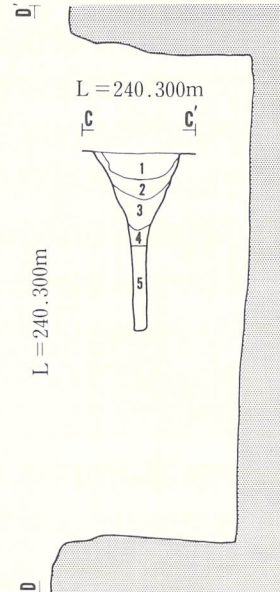
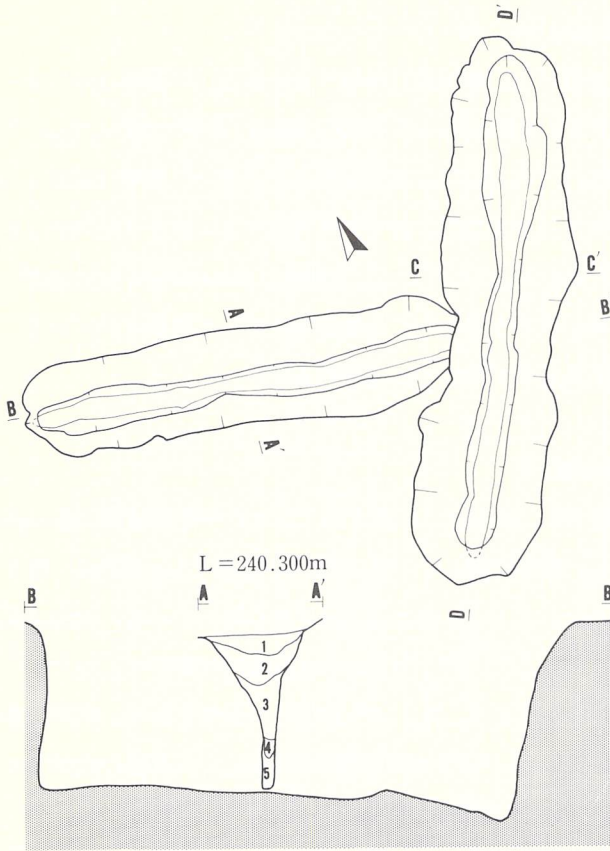
調査区南側緩斜面H20グリットに位置する。検出面はIV層下面である。平面形は開口部・底部ともに溝状、断面形はY字状を呈する。規模は開口部で364×83cm、底部で344×20cm、深さ139cmを測る。長軸の方向は北西―南東を示している。底部は北西に抉り込んでいる。底面は緩やかに凹み、側壁は底面からほぼ垂直に立ち上り、開口部付近では西側は外傾しながら大きく外反し、東側は丸みをもちながら緩やかに外反する。埋土は黒褐色土が主体であり、壁の崩壊土と思われる南部浮石がブロック状に堆積している。本遺構は第105号陥し穴状遺構の西側中央部に直交し、第105号陥し穴状遺構により南東の先端部を切られている。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。

#### 第108号陥し穴状遺構（第10図 写真図版6）

調査区南側緩斜面のG19グリットに位置する。検出面はV層上面であるが、褐色土の上面ではプランを明確に把握することが出来なかった。平面形は開口部・底部ともに溝状、断面形はY字状を呈する。規模は開口部で325×77cm、底部で313×15cm、深さ98cmを測る。長軸の方向は北西―南東を示している。本遺構は開田と農道のため攪乱されており、本来はもっと深かったものと思われる。底面は緩やかに凹み、長軸方向の北西は抉り込んでいる。側壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっており、開口部付近で大きく外反している。埋土は開口部では黒褐色土が、底面上位壁面から底面では褐色土に壁の崩壊土と思われる南部浮石が混入し、互層をなしている。

遺物は出土していないが、形状や埋土から縄文時代に比定される。

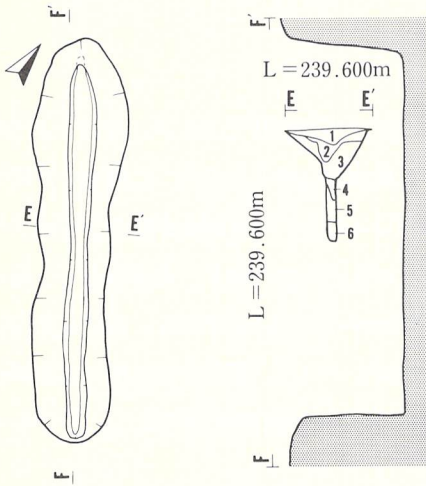


第105号陥し穴状遺構

1. 7.5Y R2/3 暗褐色 砂質土に黒色土混入
2. 7.5Y R2/1 黒色 1層土に砂質土混入
3. 7.5Y R2/2 黒褐色 黒色土に南部浮石多量混入
4. 10Y R5/6 黄褐色 南部浮石
5. 10Y R3/3 暗褐色 粘性あり 八戸火山灰相当

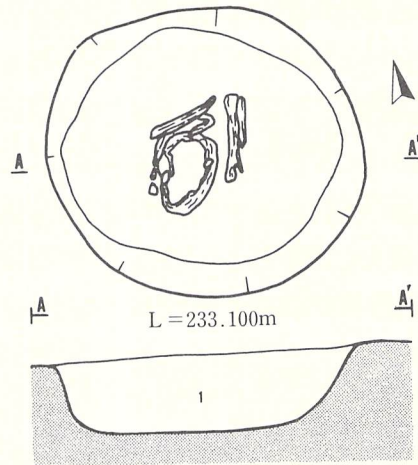
第106号 陥し穴状遺構

1. 7.5Y R2/3 暗褐色 砂質土に黒色土混入
2. 7.5Y R2/1 黒色 1層土に南部浮石混入
3. 7.5Y R2/2 黒褐色 南部浮石に砂質土混入
4. 10Y R3/3 暗褐色 南部浮石と砂質土混入
5. 10Y R5/6 黄褐色 粘性あり 八戸火山灰相当層



第108号 陥し穴状遺構

1. 7.5Y R2/2 黒褐色 黄褐色浮石細粒混入
2. 7.5Y R2/1 黒色 黄褐色浮石混入
3. 10Y R2/3 黒褐色 黄褐色浮石多量混入
4. 7.5Y R2/3 極暗褐色 南部浮石に褐色土混入
5. 10Y R4/6 褐色 南部浮石と砂質土混入
6. 7.5Y R3/4 暗褐色 南部浮石と砂質土混入



墓 墳

1. 7.5Y R3/4 暗褐色 粘性あり 軟らかい南部浮石多量混入

第10図 陥し穴状遺構(3)・墓墳

### 3 墓 壙

#### 墓 壙 (第10図 写真図版6)

調査区南東側の緩斜面上方のG25グリットに位置する。検出面はV層上面である。平面形は円形、断面形は箱形を呈する。規模は開口部の径85×79cm、底部の径73×61cm、深さ21cmを測る。埋土は、大粒の南部浮石が多量に混じった黒色土で形成されている。

遺物は1体分の人骨である。また、人骨の直下から座棺の底板と思われる板材が出土している。人骨の残存状況は比較的良好で頭部をめぐるように頭蓋骨の周辺から7枚の古銭が出土している。遺構の時期については古銭の残存状況が極めて悪く判読が困難であるが、4枚は「永楽通寶」と判読できることから、墓壙は少なくとも中世末期以降に比定される。

### 4 遺構外の出土遺物

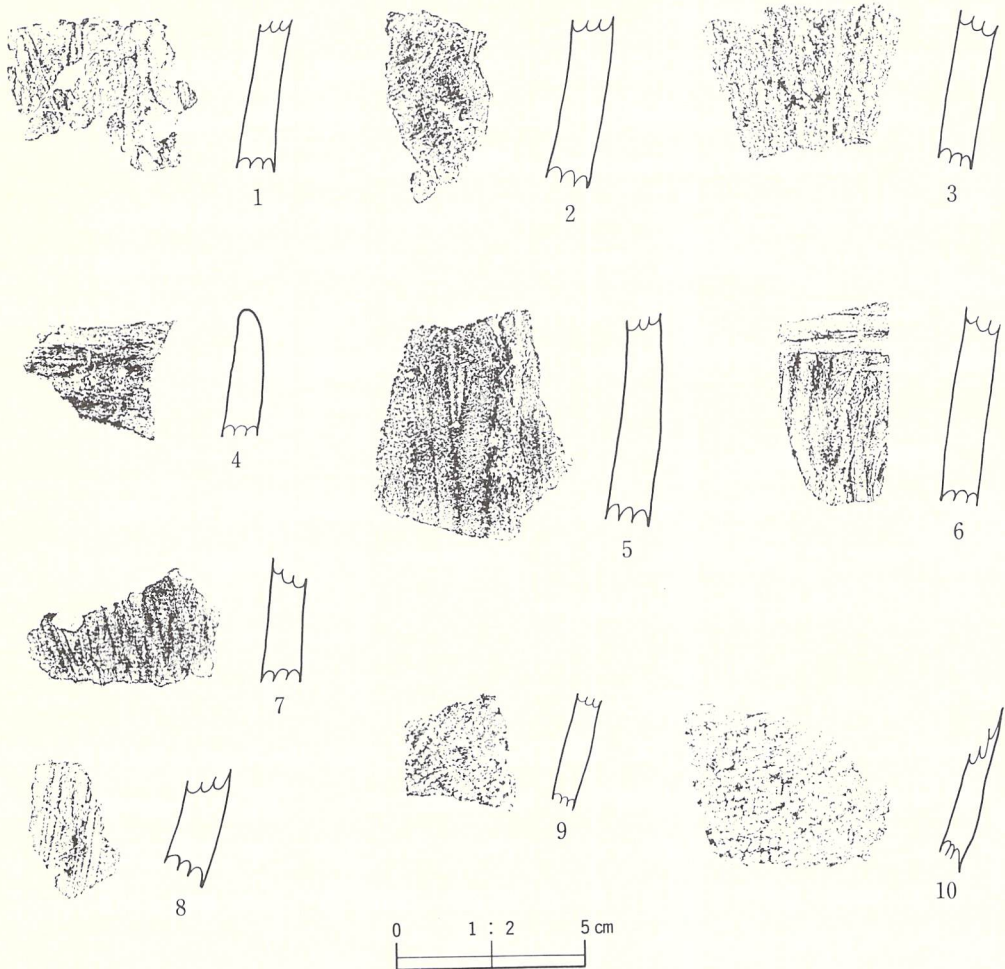
遺構外から出土した遺物は、縄文土器55点、石器19点、土師器数点である。土器はコンテナ(46×37×30cm)約1箱分と量的に少ないうえに細片が多い。また、石器についても欠損するものが多く、その形状を留めるものが少ない。

#### 土 器 (第11図1～10 写真図版7)

主体を占めるのは、縄文時代早期と後期に属する土器である。1～8は縄文時代早期の深鉢形土器である。1～3と5～8は胴部下半、4は口縁部である。2は胎土に少量の植物性繊維が混じる。3は裏面に黒色の付着物がある。焼成はいずれも良好で、硬く緻密である。6には横方向に浅い線状の文様が見られる。9～10は縄文時代後期に属するが、器種は不明である。表面は斜行する単節縄文が施文され、全体に脆弱である。

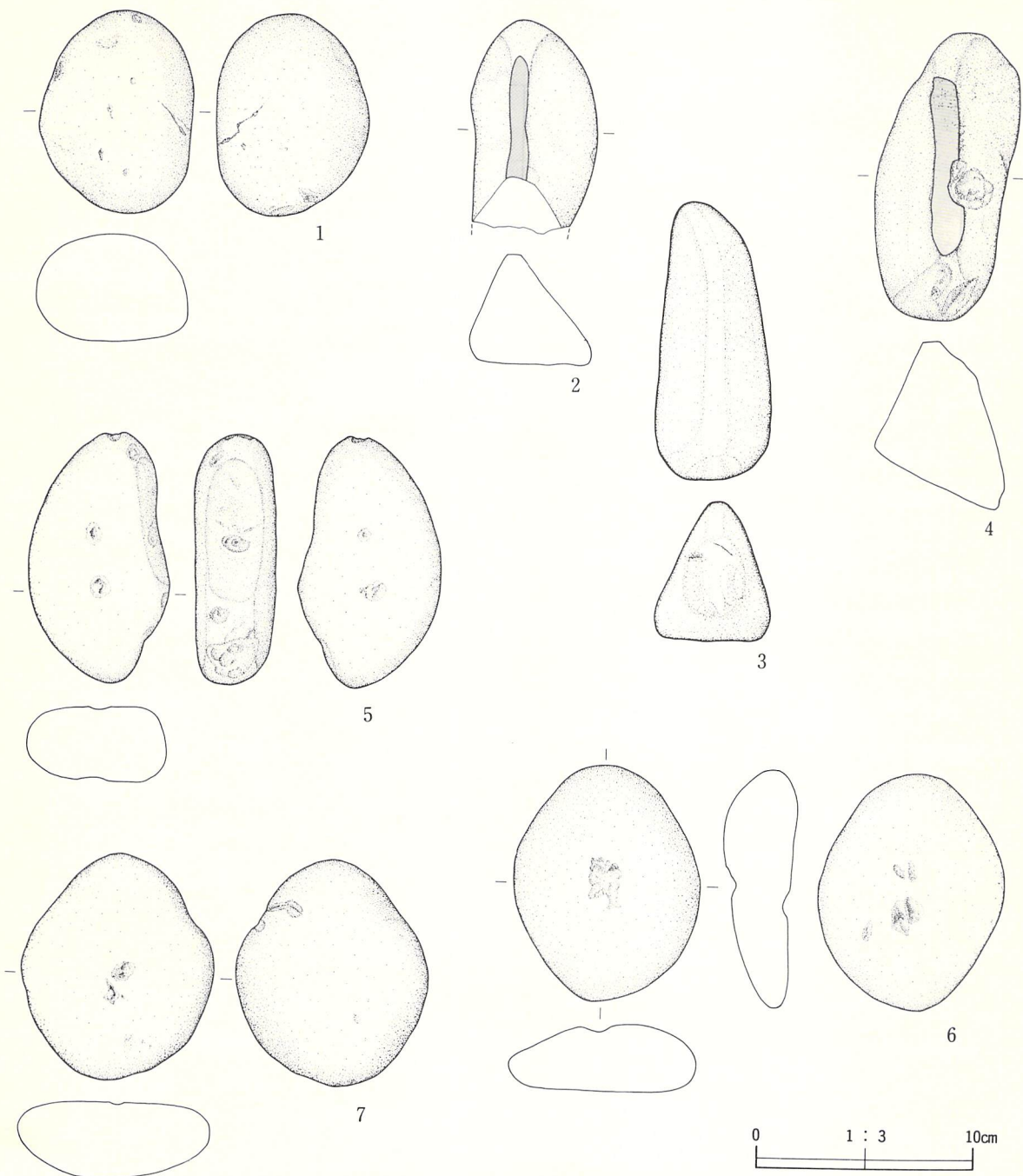
#### 石 器 (第12図1～7 写真図版7)

遺構外から出土した石器は、礫石器である。1～4は磨石である。1は上下の広い両面を磨面とし、2・3・4は三角形をした自然石の凸部を磨面として利用している。特に2・4は凸部が強く磨られた跡が認められる。3は磨面の凸部の使用痕跡はあまり明確ではないが、下端に二列の平行した凹みがあり、上端には叩きの跡が見られる。5～7は凹石である。5は両面とも2カ所の浅い凹みを持ち、右側面にも2カ所の凹みを持つが、下部の凹みは比較的深く自然に大きく凹んだ部分を叩いて利用してたものと思われる。6は上面に1カ所、下面に2カ所の浅い凹みを持っている。7は凹石としては比較的浅い凹みである。



第11図 遺構外出土遺物 土器

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴	内面調整	写真図版
1	遺構外・Ⅲ層	深鉢	胴部	無文	ミガキ	7-1
2	遺構外・Ⅲ層	深鉢	胴部	無文 植物性繊維・沼鉄含む	ミガキ	7-2
3	遺構外・Ⅲ層	深鉢	胴部	無文	ミガキ	7-3
4	遺構外・Ⅲ層	深鉢	口縁部	無文	横方向のミガキ	7-4
5	遺構外・Ⅲ層	深鉢	胴部	無文	ナデ	7-5
6	遺構外・Ⅲ層	深鉢	胴部	無文	ナデ	7-6
7	遺構外・Ⅲ層	深鉢	胴部	無文	ミガキ	7-7
8	遺構外・Ⅲ層	深鉢	胴部	無文	ナデ	7-8
9	遺構外・Ⅲ層	不明	胴部	斜行縄文	ナデ	7-9
10	遺構外・Ⅲ層	不明	胴部	斜行縄文	ナデ	7-10



第12図 遺構外出土遺物 礫・石器

番号	出土地点・層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	写真図版
1	遺構外・表土	磨石	9.3	7.0	4.9	430	輝緑安山岩	7-1
2	遺構外・III層	磨石	(9.2)	5.6	5.0	341	硬砂岩	7-2
3	遺構外・III層	磨石	12.8	5.3	6.2	545	硬砂岩	7-3
4	遺構外・III層	磨石	13.2	6.0	7.7	800	硬砂岩	7-4
5	遺構外・III層	凹石	11.5	6.5	3.5	371	硬砂岩	7-5
6	遺構外・III層	凹石	10.9	8.6	3.0	345	硬砂岩	7-6
7	遺構外・III層	凹石	10.5	8.9	3.5	380	輝緑安山岩	7-7

## V まとめ

### 1 遺構について

調査区域のほぼ全域は、開田・耕作などの人為的改変をうけ、必ずしも遺存状態は良好でなかったが、調査区の北端部から6基、南端の平坦部から3基の土坑、南端の平坦部から9基の陥し穴状遺構、最南端部の斜面上部から中世末期以降の墓壇1基が検出されている。遺構に伴う遺物の出土は墓壇以外からは全くなく全ての遺構についての時期を特定することは不可能であった。

#### (1) 土坑

土坑の埋土に中礫浮石の含まれているものが3基あり、過去の調査例から少なくともその下限を縄文時代前期以前に比定することが可能であり、他の形状が類似する土坑も近い時期のものと思われる。遺構に伴う遺物は出土していないが、形状としては陥し穴などの可能性も考えられる。また、貯蔵穴・墓壇説など様々な説があるフラスコ形の土坑が1基検出されているが、用途を推測できる資料は確認されなかった。

#### (2) 陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は、中礫浮石層を掘込んで構築されていることから少なくとも土坑類よりは時期が新しいものと考えられる。第103～108号陥し穴状遺構の検出については開田・耕作などのために攪乱されており、その規模と形状が把握しにくい状況であった。重複する陥し穴状遺構が2基あり、1基は以前の陥し穴状遺構の埋没後に構築している。長軸方向が南北方向のもの3基、北西―南東方向のもの4基、北東―南西のもの2基である。遺構に伴う遺物は出土していないが、検出面・形状から縄文時代のものと思われる。

#### (3) 墓壇

調査区最南端の斜面上部から墓壇が1基検出された。埋葬形態は座棺を用いたものであり、副葬品として7枚の六道銭が出土し、その内の4枚については「永楽通寶」と判読できる。このことから中世末期以降の土葬墓であると思われる。しかし、中世末期以降にこの区域が墓域として利用された可能性は少ない。

### 2 遺物について

出土遺物は少なく、すべて遺構外から出土したものである。遺物は調査区の瀬月内川に面した最南端斜面の中礫浮石相当層から、縄文時代早期の土器、磨石・凹石などの礫石器が出土している。南端の斜面から南側の平坦面にかけてと北端からは、縄文時代早期・後期に比定される土器片が若干出土している。調査区中央部からは奈良・平安時代に属するヘラミガキの調整

痕を持つ土師器の細片が数点出土している。また、遺跡の北側にある山林斜面から、現在でも縄文前期・後期の土器が採集できることから、遺跡周辺には、これらの土器と関連を持つ遺構の存在が予想される。

### 3 まとめ

調査の結果、本遺跡は縄文時代には狩り場として利用された可能性が大きいものと思われる。さらに、土坑については調査区域内から住居跡が検出されず、遺物も極めて少ないことから、生活居住区域としては考えにくく、狩り場の可能性が大きいと思われる。

調査区最南端斜面から約50m、瀬月内川の対岸には管波 I 遺跡がある。ここからは縄文時代の竪穴住居跡等が検出され、さらに縄文時代早期の貝殻文系の土器が出土している。このことから瀬月内川を挟んだこの周辺には縄文時代早期の集落の存在した可能性があると思われる。

### 引用・参考文献

- 函館市立博物館（1973）：「函館志海苔古銭—北海道中世備蓄古銭の報告書—」
- 石川長喜（1983）：「発掘調査された墳墓について」『紀要Ⅲ』（財）岩手県埋蔵文化財センター
- 岩手県埋蔵文化財センター（1982）：『川向Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第26集
- 〃（1982）：『田代遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第41集
- 〃（1983）：『滝谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第49集
- 〃（1983）：『嶽Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第50集
- 〃（1983）：『伊保内Ⅰ a・Ⅰ b 遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第53集
- 〃（1983）：『江刺家Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第59集
- 〃（1983）：『道地Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第64集
- 〃（1984）：『江刺家遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第70集
- 〃（1983）：『嶽Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第78集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1988）：『平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第125集
- 〃（1989）：『管波Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第139集

写 真 图 版





遺跡遠景（東から）

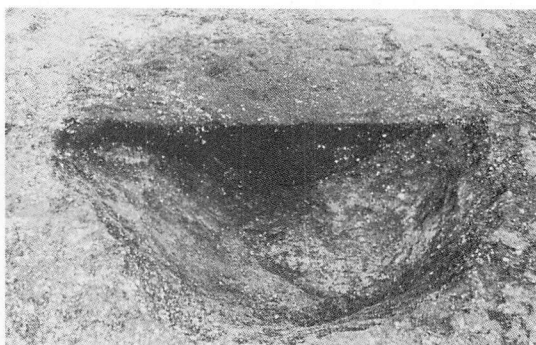


遺構検出状況（東から）

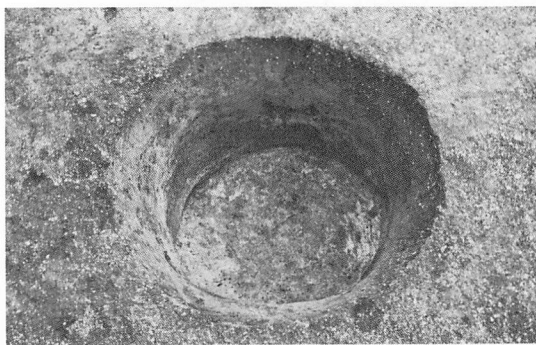
写真図版Ⅰ 遺跡全景



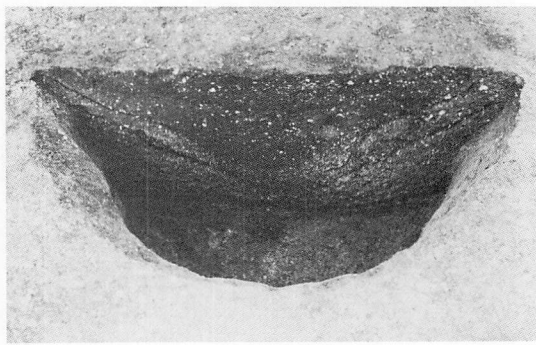
第51号土坑平面



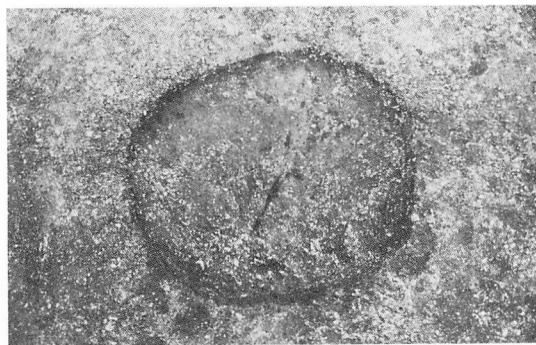
第51号土坑断面



第52号土坑平面



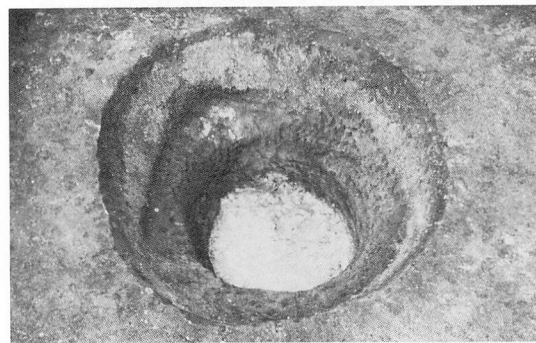
第52号土坑断面



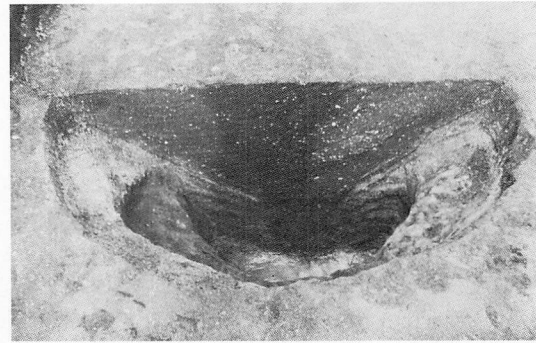
第53号土坑平面



第53号土坑断面

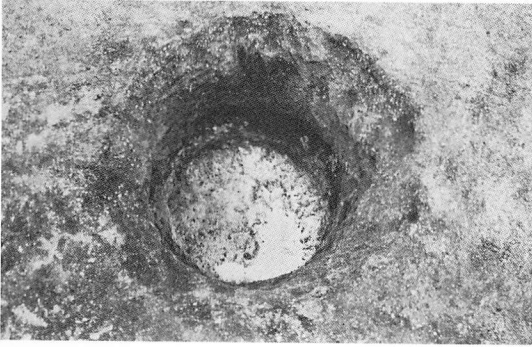


第54号土坑平面

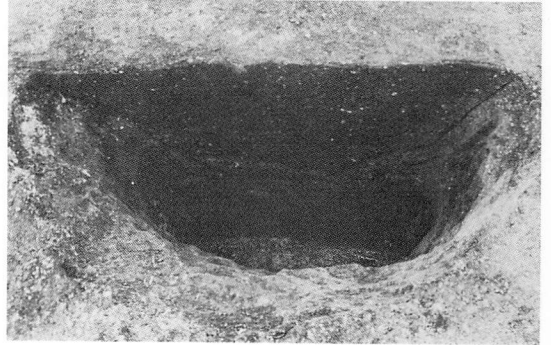


第54号土坑断面

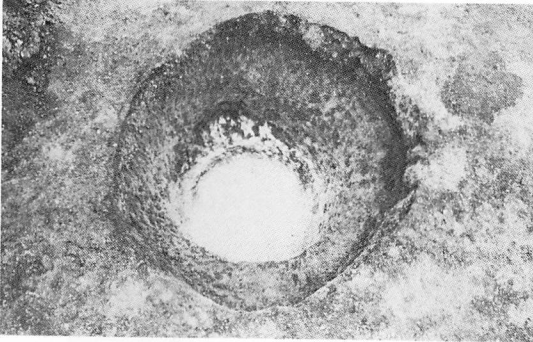
写真图版 2 土坑(1)



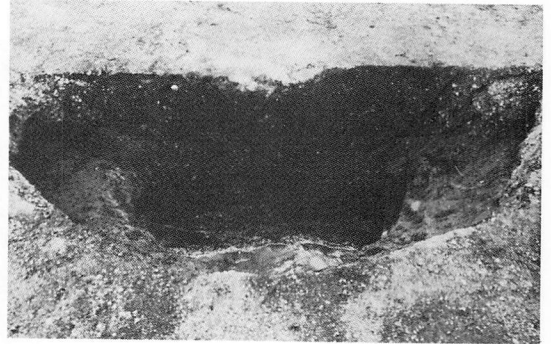
第55号土坑平面



第55号土坑断面



第56号土坑平面



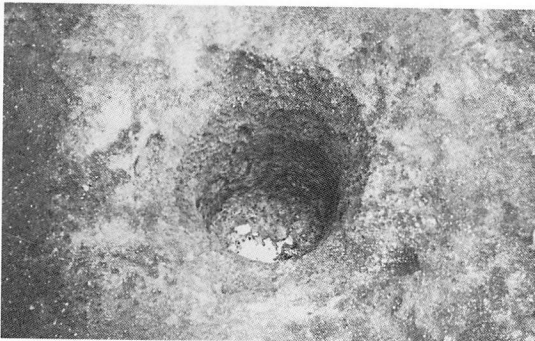
第56号土坑断面



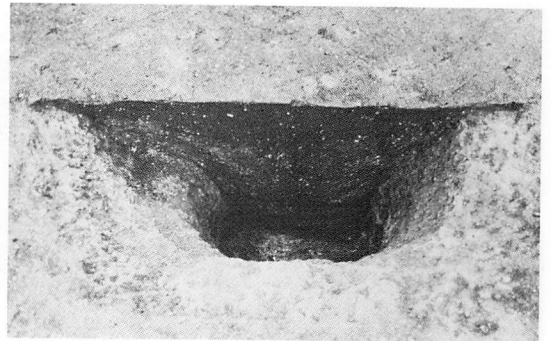
第57号土坑平面



第57号土坑断面

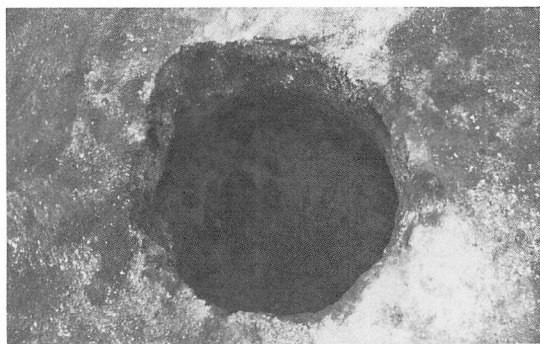


第58号土坑平面

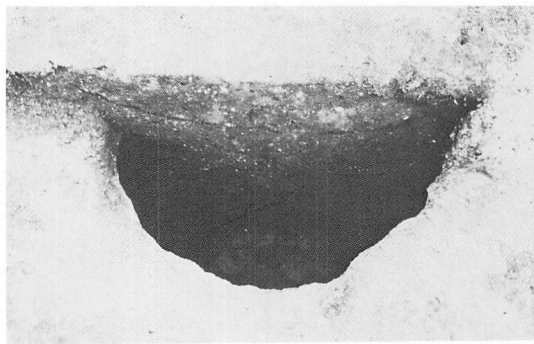


第58号土坑断面

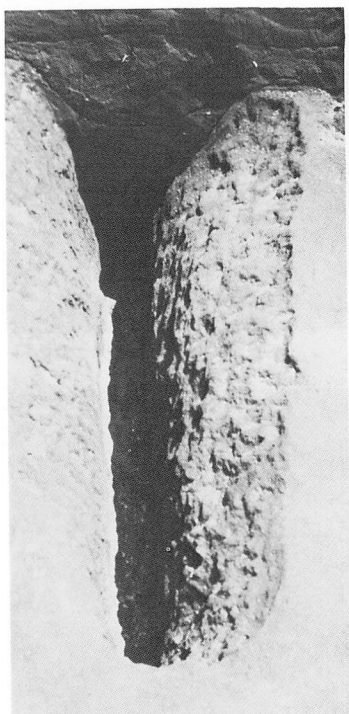
写真图版 3 土坑(2)



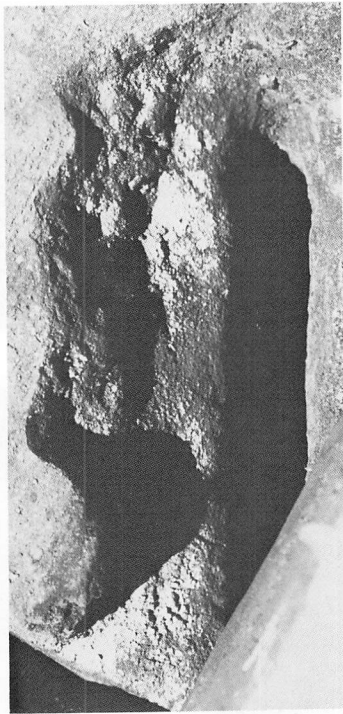
第59号土坑平面



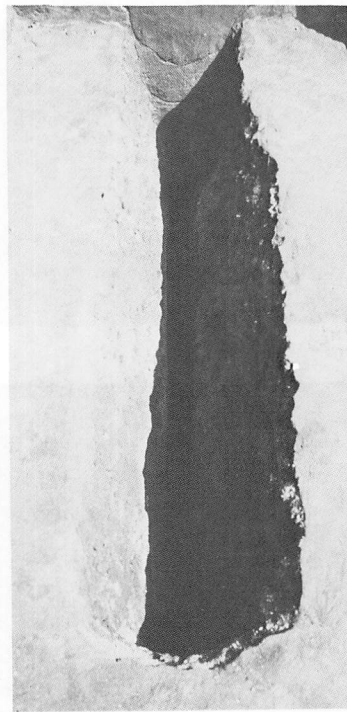
第59号土坑断面



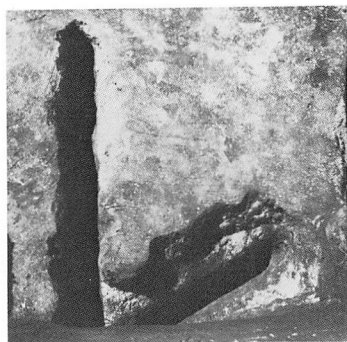
第101号陷し穴平面



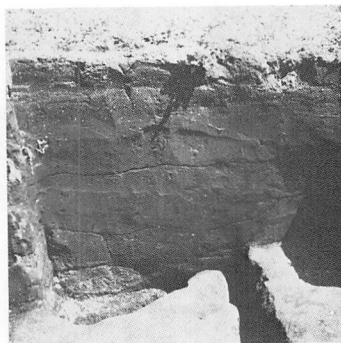
第109号陷し穴平面



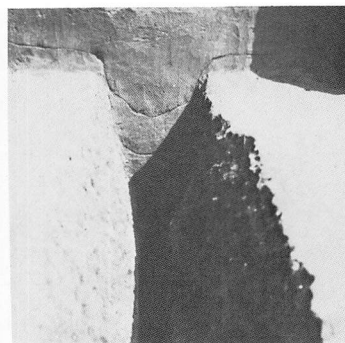
第102号陷し穴平面



第101・109号重複状況

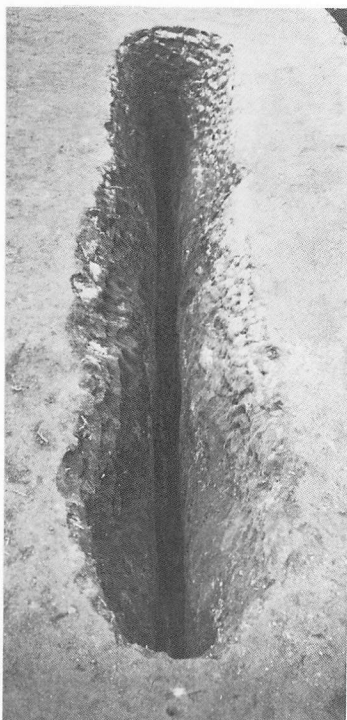


第109号陷し穴断面

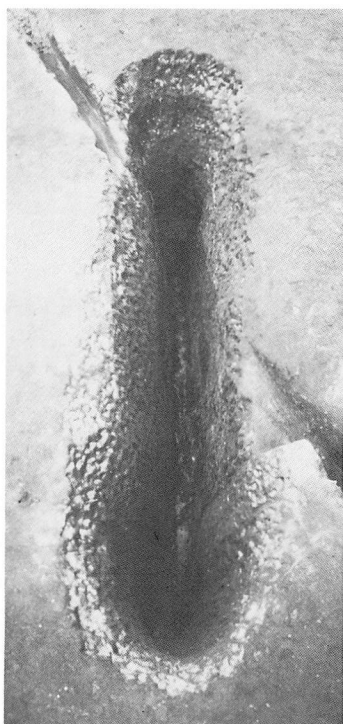


第102号陷し穴断面

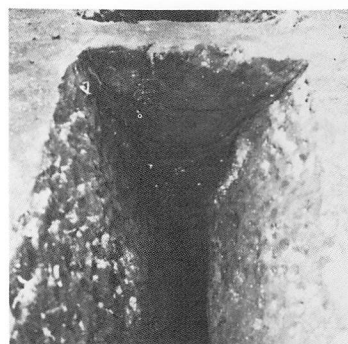
写真図版 4 土坑(3) 陷し穴状遺構(1)



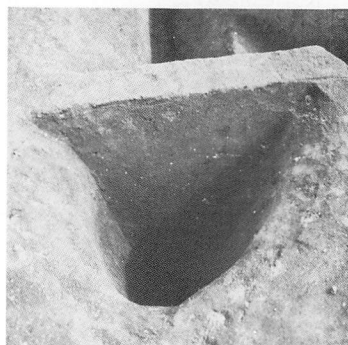
第103号陥し穴平面



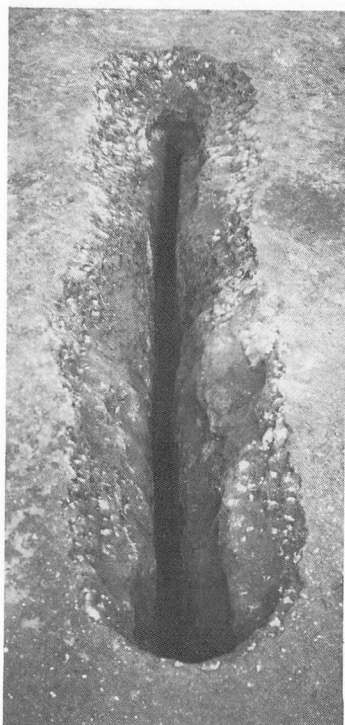
第104号陥し穴平面



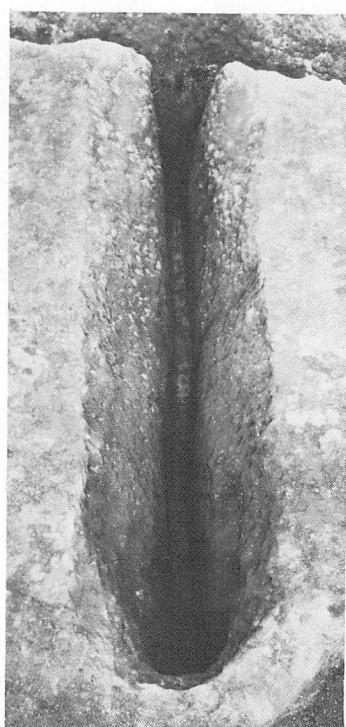
第103号陥し穴断面



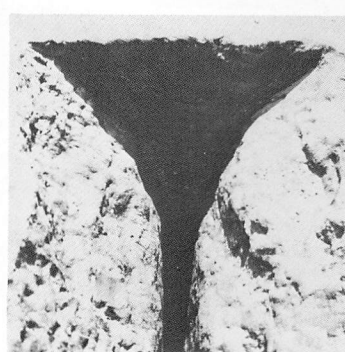
第104号陥し穴断面



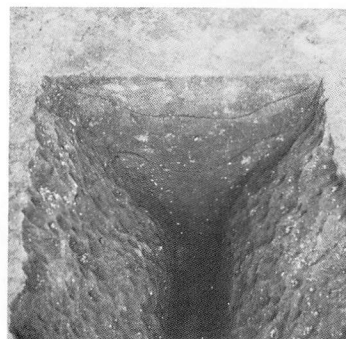
第105号陥し穴断面



第106号陥し穴断面

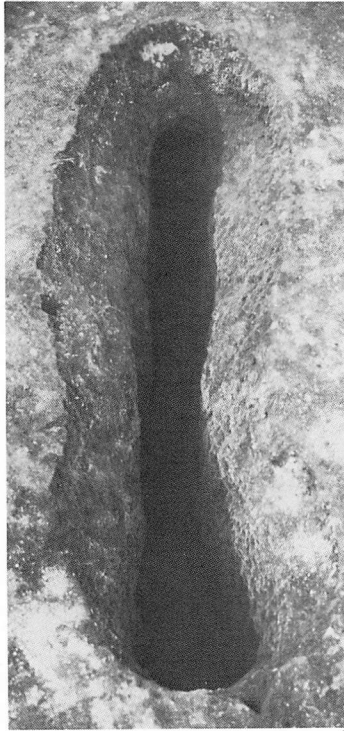


第105号陥し穴平面

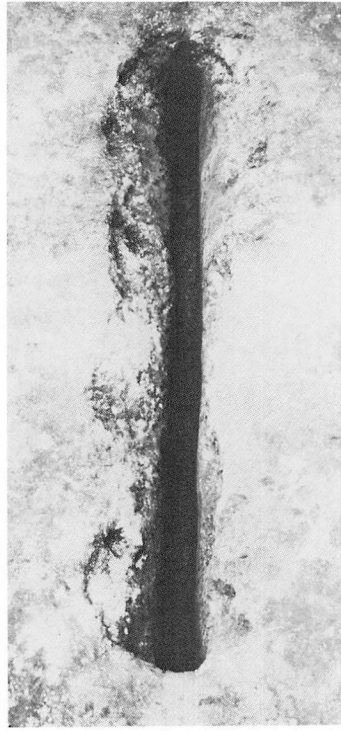


第106号陥し穴平面

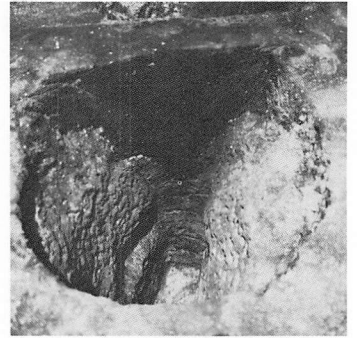
写真図版 5 陥し穴状遺構(2)



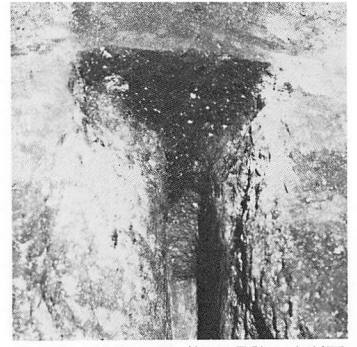
第107号陥し穴平面



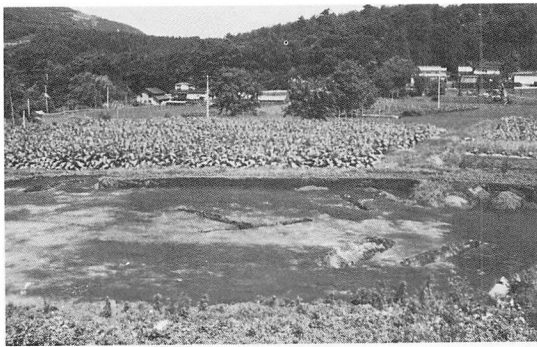
第108号陥し穴平面



第107号陥し穴断面



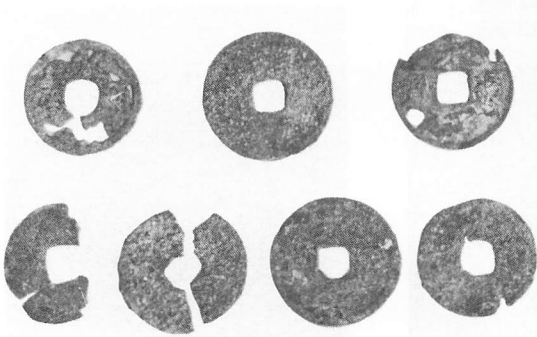
第108号陥し穴断面



第103号～第106号陥し穴群（南東から）



墓壙人骨出土状況

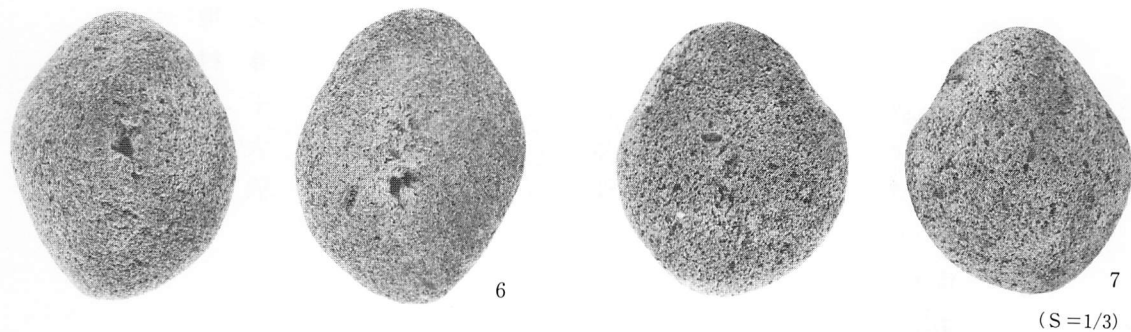
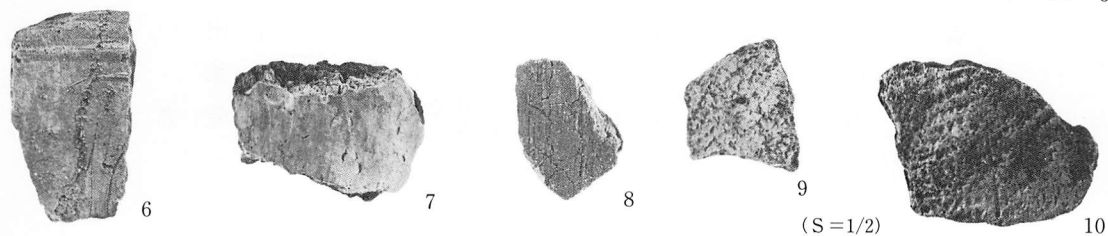
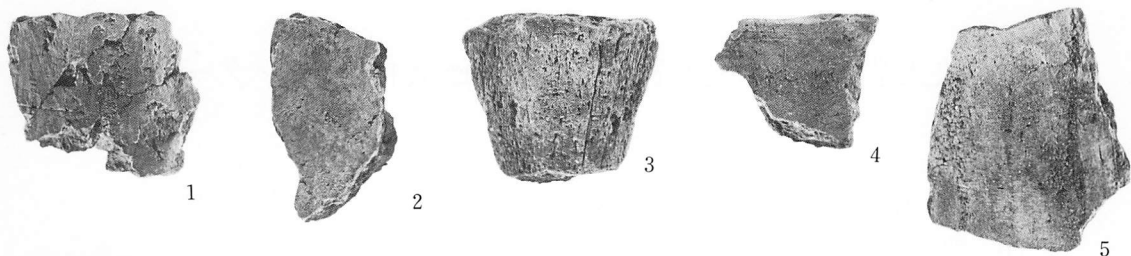


墓壙出土古銭



墓壙平面

写真図版6 陥し穴状遺構(3)墓壙



写真図版7 遺構外出土遺物 土器・礫石器

# 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	小笠原 喜 一		
副 所 長	米 澤 康 雄		
〔管 理 課〕			
管理課長(兼)	米 澤 康 雄	嘱 託	吉 田 一 男
課長補佐	森 岡 陽 一	〃	山 館 昇
主 事	阿 部 隆 広	運 転 技 師 兼 技 能 員	佐 藤 春 男
〔調 査 課〕			
調 査 課 長	昆 野 靖		
課長補佐	佐々木 嘉直		
主任文化財 専門調査員	小田野 哲憲	文 化 財 專 門 調 査 員	佐々木 信 一
〃	三 浦 謙 一	〃	小 原 眞 一
〃	工 藤 利 幸	〃	村 上 修
〃	高 橋 與右衛門	〃	酒 井 宗 孝
〃	平 井 進	〃	松 本 建 速
〃	中 村 良 一	〃	金 子 昭 彦
〃	中 川 重 紀	〃	濱 田 宏 久
〃	藤 村 敏 男	期 限 付 專 門 調 査 員	菅 常 裕
〃	高 橋 義 介	〃	相 原 伸 世
文 化 財 專 門 調 査 員	斎 藤 實 隆	〃	及 川 勝 則
〃	佐 瀬 隆 雄	〃	阿 部 明 芳
〃	千 葉 孝 雄	〃	菊 池 涉 之
〃	齋 藤 博 司	〃	及 川 雅 宏
〃	東海林 隆 幹	〃	星 下 己 裕
〃	佐々木 均 行	〃	森 鈴 木 幸 隆
〃	川 村 貞 格	〃	菊 地 悟 茂
〃	伊 東 修 雄	〃	藤 千 葉 保 博
〃	遠 藤 邦 敏	〃	大 久 保 博 由
〃	斎 藤 敏 明	〃	熊 谷 博 由
〔資 料 課〕			
資 料 課 長	高 橋 薰		
主任文化財 専門調査員	田 鎖 壽 夫		



---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第154集

## 葉ノ木沢遺跡発掘調査報告書

国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

印刷 平成2年8月25日

発行 平成2年8月31日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185

TEL (0196) 38-9001・9002

印刷 株式会社 杜陵印刷

〒020-01 盛岡市みたけ二丁目22-50

TEL (0196) 41-8000(代)

---

---

© 岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター1990